【資料紹介】佐世保市前原遺跡・南島原市出口遺跡出土の火打石ならびに小倉大道銘火打金（民具）の報告

藤　木　　聡

2025年 9 月

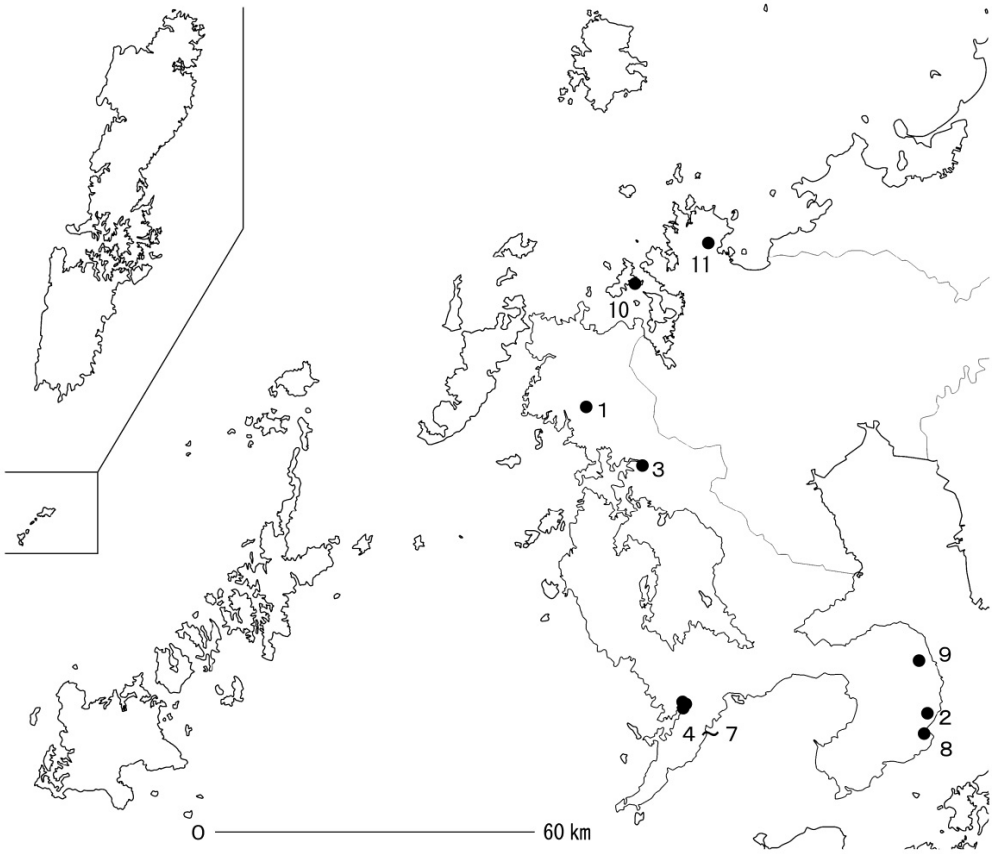
『西海考古』第15号　抜刷

【資料紹介】佐世保市前原遺跡・南島原市出口遺跡出土の火打石ならびに小倉大道銘火打金（民具）の報告

藤木　　聡

はじめに

かつての人々の生活の中で、火は身近で当たり前の存在であった。そんな火と人の歴史を知るうえで、火を得るために発見・継承されてきた火起こしの技術とそれを支えた物質文化を明らかにすることが重要であり、本稿では、佐世保市の前原遺跡ならびに南島原市の出口遺跡から出土した火打石を報告する。また、火打石とセットとなる火打金については、長崎県域出土品には、元寇関係となる鷹島神崎遺跡の２点（松浦市教育委員会 2015)、南島原市所在の亀の首遺跡の１点（南島原市教育委員会 2011）であり、肥前地域に広げても、唐津市所在の馬部甚蔵山遺跡の土坑墓出土例（唐津市教育委員会 1988・徳永ほか 2004）が加わって３遺跡４例であり、九州全体で約100例近くある中で少数である（藤木 2025)。資料数がきわめて限定的な現状の中、島原城展示の火打金は、民具とはいえ肥前地域の考古資料の不足を補う点で重要であり、さらに小倉大道銘であることも後述するとおり注目点となるため、合わせて報告する。



１．前原遺跡　２．出口遺跡　３．早岐瀬戸遺跡　４～７．長崎奉行所跡・岩原目付屋敷跡・出島和蘭商館跡・魚の町遺跡　８．亀の首遺跡　９．津吹遺跡　10．鷹島神崎遺跡　11．馬部甚蔵山遺跡

図１　本稿に登場する主な遺跡の分布図

2　前原遺跡出土の火打石の報告

佐世保市中里町に所在する前原遺跡は、彼杵と平戸を結ぶ平戸往還沿いの中里宿の一角にあたる。2014年に実施された発掘調査により、主に17世紀末から19世紀中頃にかけての集落跡が発見され、遺物包含層ならびに遺構検出面となる２層を中心に主に17世紀前半から近代以降までの遺物が出土した（佐世保市教育委員会 2022）。

図２－１～３は、調査報告書では未掲載で今回が初出の火打石である。いずれも円磨された礫が打ち割られて火打石に用いられている。１は、淡紅色の珪岩製。剥離面どうしからなる稜線は、顕著な潰れ・摩滅によって鋭さが失われて丸みを帯びており、器面全体に手擦れ感がある。長さ3.3㌢×幅3.5㌢×厚み2.4㌢・重量30.4㌘、注記はH26マエハラⅡである（図２写真左）。２も淡紅色の珪岩製。礫面と剥離面の境の稜線を中心に弱い潰れがみられる。5.1㌢×3.0㌢×2.5㌢・重量32.4㌘、注記はH26マエハラⅠである。３は、わずかに赤みを帯びる白い石英製。下端や両側縁に弱い潰れがある。3.7㌢×2.5㌢×1.2㌢・重量13.3㌘、注記はH26マエハラP-174である。

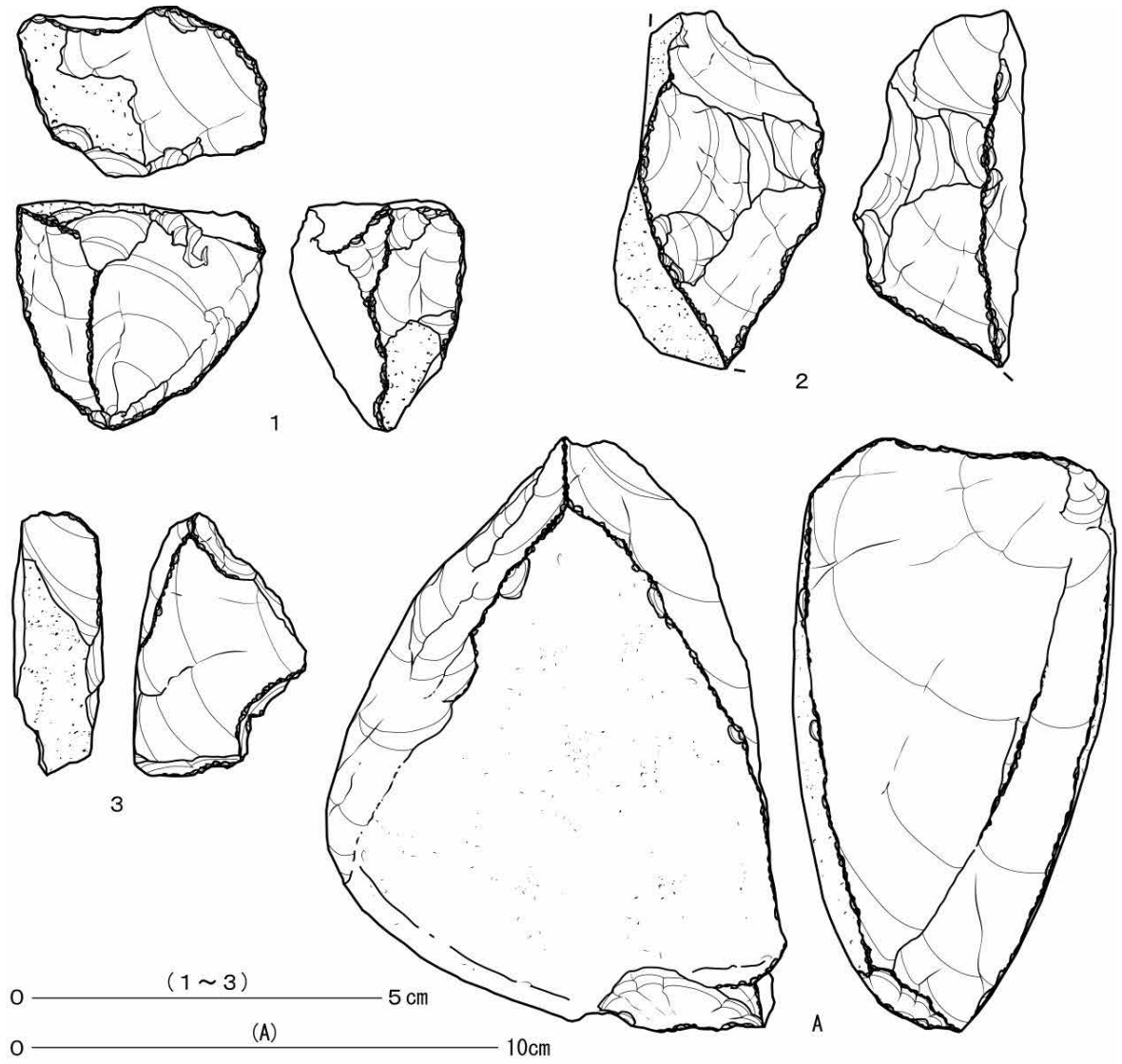
このほか、前原遺跡からは、円磨された珪岩礫や石片等がいくつか出土している（図２－Ａ～Ｅ）。火打石に用いるために持ち込まれた原石や使用に至らなかった石片の可能性もあるが、判然としない。参考に、円磨された珪岩礫の１点を図化した。図２-Ａは、やや黄みを帯びる珪岩製。層理に由来すると思われるヒビ状の筋が入っており、割れ面に段差が生じている。礫面と割れ面あるいは割れ面どうしのなす稜線に潰れがみられ、一部では潰れというより円磨面に近くなっている。さらに、割れ面そのものも全体に摩滅し、凹凸のある滑らかな手触りとなっている。この潰れや摩滅について、人為的なものではなく、円磨された礫が割れたのち、河川等において礫どうしがぶつかる・水磨される過程で生じた、あるいは柱穴出土という点からは、何らかの接触等で偶然についた潰れ等とみて良さそうである。12.7㌢×9.9㌢×6.9㌢・重量1023.6㌘、注記はH26マエハラP164である。

前原遺跡で火打石に用いられた珪岩の岩石学的な特徴を箇条書きすると、①礫面の残り方からみて、岩盤を割り出したものではない、②Ａも含めるとサイズとして７～20cm・厚み５～10cm大の円磨された礫に復元される、③礫面の円磨度は高い、④淡紅色～淡褐色をしている、等が挙げられる。この特徴に最も近いのは、「最大20㎝に達するものもあり、純淡白色～淡紅色を呈し、（中略）チャートとともに本砂礫層に特徴的な礫の１つである」（岩橋 1961, p85）という八ノ久保砂礫層中のものである（註１）。前原遺跡の火打石の原礫は、八ノ久保砂礫層の露頭あるいはそこから流出した河原等で採集されたものであろう（註２）。

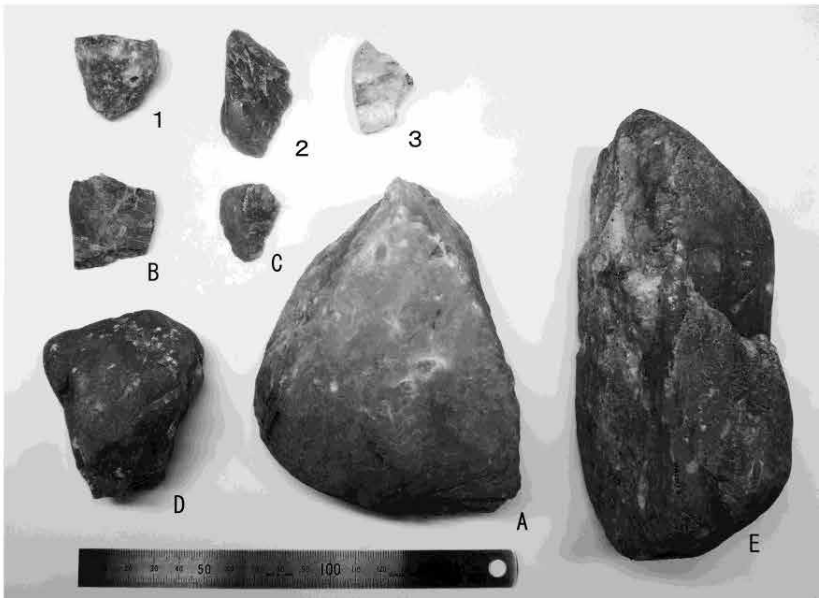
3　出口遺跡出土の火打石の報告

南島原市深江町に所在する出口遺跡では、2016～2019年の発掘調査により、主に縄文時代後期から晩期、中世の遺構・遺物が発見された。このうち、中世については、遺物からみて12・13世紀ならびに15・16世紀の２つの時期があり、掘立柱建物群25棟・柱穴列２基・大溝２条等が検出されている。圃場整備事業による限定された発掘調査区とはいえ、南島原市域において中世期の遺跡の様相が城郭以外で明らかとなる数少ない事例とされる（南島原市教育委員会 2021）。

火打石の関係資料は３点あるが、調査報告書（南島原市教育委員会 2021）にそれとして記載されていたものではない。図３－１は火打石であるが、調査報告書の第58図11で縄文時代後期から晩期のチャート製石核として報告されたものである。調査報告書へ図化掲載された縄文時代の剥片石器について、石材に注目すると、石核11点中10点が腰岳産ほかの黒色黒曜石製で１点のみがチャート製、スクレイパー８点は全てサヌカイト製、打製石鏃と同未製品９点は全て黒曜石製等となっており、石核



写真左：潰れて丸みを帯びた稜線（１の裏面側）



写真右：前原遺跡の火打石とその関連資料

図２　前原遺跡出土の火打石等

中に１点のみというチャート製石器の存在が目を引くのであるが、結果的にこれが縄文石器でなく火打石となったのである。改めて観察すると、稜線の多くに潰れが残されている。AJ25グリッドのⅣ層出土で、2.65㌢×3.4㌢×2.2㌢・重量17.8㌘である。

残る２点は、層位（Ⅲ～Ⅴ層）別の石器石材ごとの点数一覧に挙がった、Ⅲ層にのみ出土したという石英６点・鉄石英１点の中から抽出された。図３－２は、平面三角形で板状になった石片のほぼ全ての稜線に顕著な潰れが残されている。石英は白色良質なものである。4.0㌢×2.3㌢×1.1㌢・重量10.1㌘である。図３－３は、AD26グリッドのⅢ層出土である。石英製火打石の欠片であり、1.7㌢×1.4㌢×0.8㌢・重量1.5㌘である。図３－２と同じ白色良質なものであり、図正面中央の稜線上に顕著な潰れが残されている。

火打石の年代については、まず、遺構・遺物分布と火打石等の出土位置から検討してみると、縄文時代と中世の遺物の分布に明確な差がなくむしろ重複しているため、平面分布から火打石等の時期を割り出すことは難しい。次に、調査報告書掲載の土器・陶磁器の層位別内訳を参照すると、縄文時代後期から晩期のものは、Ⅲ層38％・Ⅳ層11％・Ⅴ層51％とⅤ層からその半数が出土しているのに対し、中世のものはⅢ層68％・Ⅳ層29％・Ⅴ層３％と約７割がⅢ層・約３割がⅣ層でⅤ層からはほとんど出土していない。Ⅲ層を中心におおよそⅣ層までに収まって中世遺物が出土している傾向を読み取り可能であり、先述のとおり石英がⅢ層にのみ出土した点も勘案すると、陶磁器等のように12・13世紀ならびに15・16世紀のいずれであるかまでは絞り込めないものの、ひとまず出口遺跡の火打石・火打石の欠片は、中世のものである可能性が高いと言える。

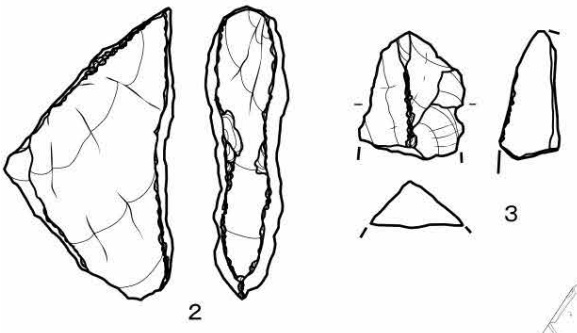
なお、注意したいのは、全24点と少ないながら、近世～現代の陶磁器等の８割が火打石と同じⅢ・Ⅳ層から出土している点である。ただし、近世～現代のものの点数比は、土器・陶磁器全体の１％未満と僅少であることから、火打石等が近世以降となる可能性はひとまず外してよいであろう。

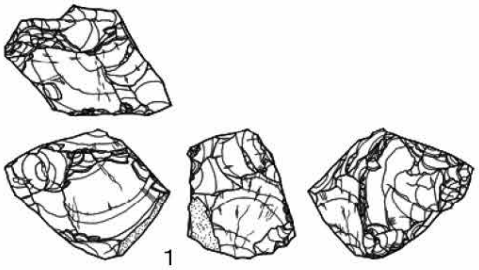
以上の検討により、出口遺跡からは、中世の可能性が高い火打石２点・火打石の欠片１点が出土していると言える。これまで、長崎県域で出土している火打石は、近世以降のものか時代不詳のものであったことから、出口遺跡の資料は、長崎県域で初の中世の可能性が高い火打石として注目される。チャートや石英の産地は特定が叶っていないものの、チャートは赤みを帯びた特徴的なもの、石英もどこにでもあるようなものでなく白色で良質のものであることから（註３）、選択的な火打石石材という印象である。同じ島原半島にある津吹遺跡では、時代不詳ながら石質の良い灰色のチャート製火打石１点が出土している（註４）。これらの石材の産地については、探索を継続したい。

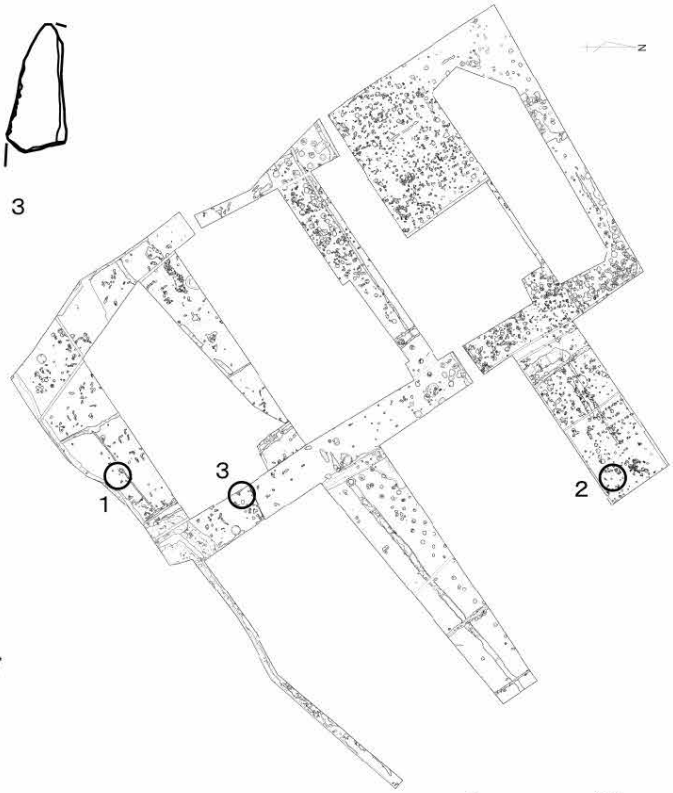
４　島原城展示の小倉大道銘火打金の報告

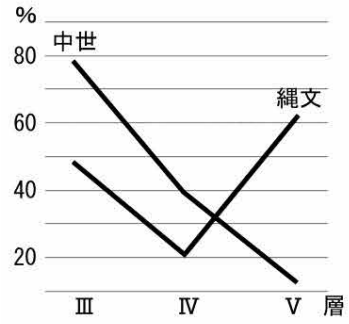
ここで紹介する火打金・火打石等は、1964（昭和39）年の天守閣復元の際に、島原市内在住の個人から寄託された民具資料で（註５）、島原城で展示公開されている。

図４－１は火打金である。木製板の一辺に鉄板を打ち込んで一体となる構造であり、木製板が持ち手、鉄板が火打石と打ち付ける打撃部となる。長辺・短辺がそれぞれ平行する木製板は、長辺9.5㌢×短辺3.5㌢×厚み1.2㌢で、火打金を打ち込んだ側でない長辺の隅角２箇所を斜めに落としており、平面縦長い六角形となっている。また、この長辺上には２箇所小さな切り込みがある。木製板の平面（図の正面）には丸囲みに「大」の文字（焼印か）があり、これと並んで、かなり不鮮明ながら、楕円形に丸囲みされた「請合」の文字（墨書きか焼印か不明確）がある。鉄板は、鏃に近い平面形状で、長辺を下辺にすると幅5.0㌢×高さ1.5～1.6㌢（木製板への打ち込み部分は高さ1.9㌢、幅0.8㌢で徐々に細くなる）であり、木製板への打ち込み側の長辺の中央付近がわずかであるが山状に高くなる。

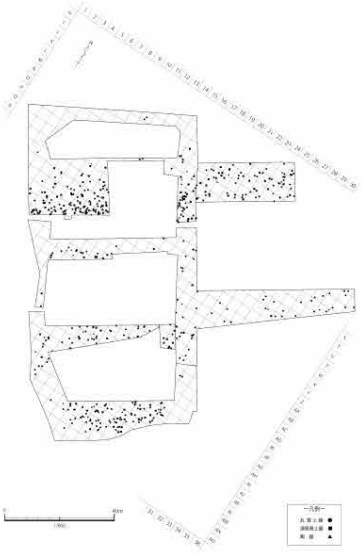




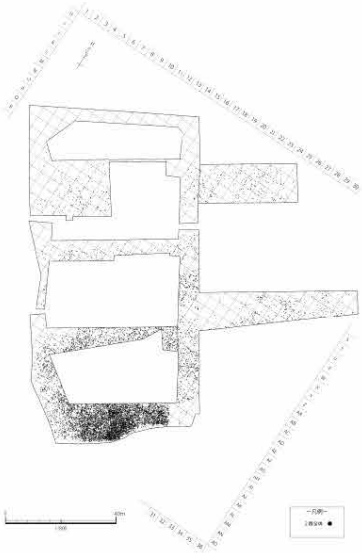




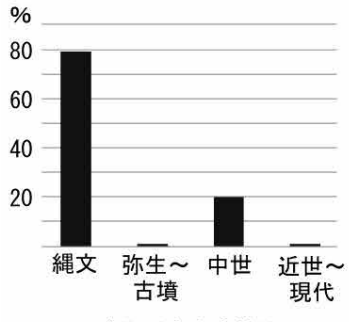
層位別出土点数比



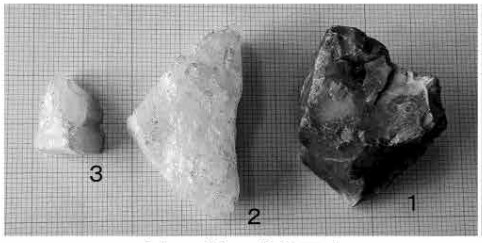
瓦質土器・須恵質土器・陶器の分布



縄文土器の分布



時代別出土点数比



火打石等の集合写真

潰れ部分の拡大（２）

図３　出口遺跡出土の火打石等

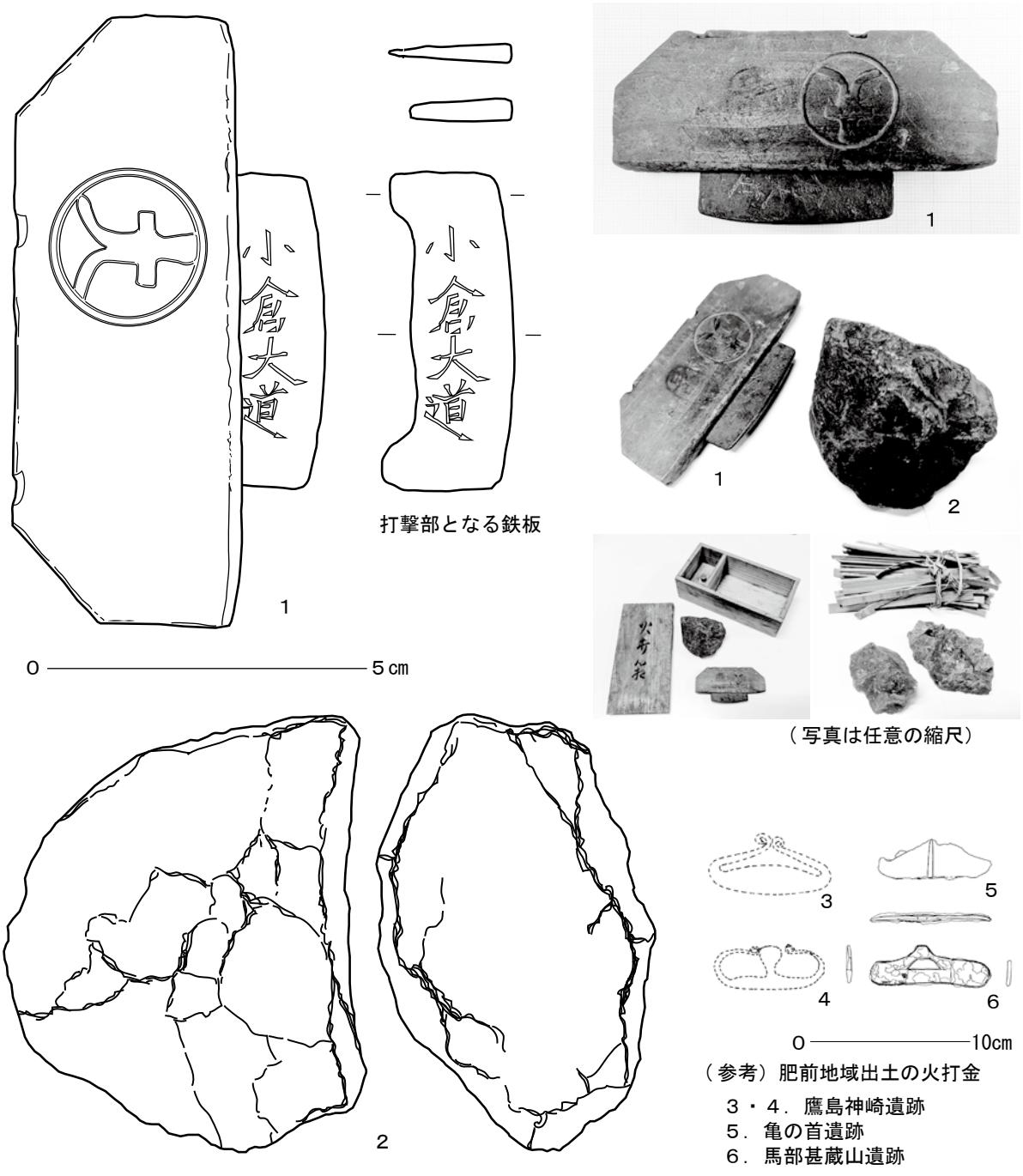


図４　島原城展示の小倉大道銘火打金・火打石（民具）

鉄板の厚みは、木製板に打ち込む側が２㍉と薄く火打石に打ち付ける長辺側が3.0～3.5㍉と厚くなり、側面からみると断面台形となる。木製板への打ち込み部分は楔状に薄く仕上げられ、側面からみると断面三角形となる。鉄板の平面（図の正面）には、「小倉大道」と鏨で切り込んでいる。重量は、木製板を含む全体で25.5㌘、鉄板部分のみで12.7㌘となる。

図４－２は、火打石である。多面体の石塊状のもので、その多くの稜線上には使用による顕著な潰れがある。器面全体にうっすらと付着物があるのか、石材の観察が困難ながら、おそらく灰黒色で良質のチャートと推定される。同様の理由で剥離面の観察も難しく、図化する際は、主な稜線と使用痕

としての潰れを追いかける形となった。6.8㌢×5.6㌢×4.4㌢・重量190.0㌘である。

なお、火打石・火打金はともに「火打箱」と墨書きされた木箱に収められている（図４写真参照）。厳密な意味では、この火打箱・火打金・火打石のセットが使用当時の本来の組み合わせであるのかは不明である。しかし、銘切りからは、全国的に知られた江戸時代の火打鍛冶の１つであるにもかかわらず、「吉井本家」「明珍」等の他の火打鍛冶と比べてその実態がほとんどわかっていない「小倉大道」の火打金であろう点、さらに寄託の経緯から、島原城下で用いられていた火打金等のセットであった可能性もあり、そうであれば豊前産「小倉大道」の火打金が肥前島原まで流通していたことを示すとも評価しうる点で、たいへん注目される。

おわりに

長崎県域では、この数年、考古資料としての火打石の報告例が増加している。例えば、近世都市長崎と早岐瀬戸とで用いられた火打石（長崎県教育委員会 2005a・藤木 2007・船築 2010・佐世保市教育委員会 2018・長崎市教育委員会 2018, 2023ほか）の特徴には、近世における物流・経済等の実態が表れている可能性が見えつつあるのだが、議論を深めるにはまだ資料の絶対数が足りない。今回のような基礎報告が、発掘現場等での気付きにつながって火打石・火打金の考古資料が増え、人と火の歴史の解像度が高まることに期待したい。

【謝辞】

まずは、報告の機会をいただいた古門雅高氏に深く感謝申し上げたい。資料調査では、石材的に難しかった前原遺跡例の観察が筆者の調査研究の転換点の１つとなっており、機会を提供いただいた松尾秀昭・柳田裕三氏に改めて感謝申し上げる。また、出口遺跡の火打石の存在予想は、遺物の悉皆的データを公開した調査報告書の存在が大前提となっており、本多和典氏に敬意を表したい。なお、特に資料閲覧等において次に挙げる方々・機関にたいへんお世話になった。文末ではあるが、お名前を挙げ感謝の意を表したい（五十音順・敬称略）。

片多雅樹・末續理・高田美由紀・竹村南洋・田中聡一・田中学・中尾篤志・濵村一成・前田加美・松元一浩・溝上隼弘・吉岡慈文・株式会社島原観光ビューロー・佐世保市教育委員会・島原市教育委員会・長崎県埋蔵文化財センター・長崎市教育委員会・南島原市教育委員会

【註】

註１　火打石の石材が八ノ久保砂礫層に由来する可能性は、柳田裕三氏からご教示いただいた。また、八ノ久保砂礫層由来の石材の利用は、旧石器時代に遡る（川道・辻田 2023）。

註２　なお、佐世保地域の火打石に関する情報として、柚木地区において「青白のかど石に鉄をこすり、蒲（がま）の穂に火薬をつけた、いわゆる「かんや」につけた」（佐世保市 1969）とあり、柚木地区で青白色の火打石（かど石）が用いられていたとわかる。石英やチャートの類であろうか。この他、火打石産地を示す地名の可能性があるものとして、「火打谷」（佐世保市三川内町）がある（藤木 2025）。

註３　諫早農業高校遺跡（長崎県教育委員会 2018）出土の石英製火打石とされた資料は、実見の結果、火打石ではなかった。石質に注目すると、出口遺跡例に比べて粗質で、明確に区別可能である

註４　火打石は、当初、椎葉産黒曜石の可能性も想定され、蛍光Ｘ線分析が実施された（長崎県教育委員会 2022）。また、旧石器石材の検討を参照すると、近隣でのチャートの産地候補の１つには、島原半島南部の口之津層群がある（川道・辻田 2023）。

註５　株式会社島原観光ビューローのご教示による。なお、島原城では、今回紹介したものと別に、チャート製火打石２点とワラ紐で縛られた付け木の束（いずれも民具）も展示されている（図４写真参照）。

【引用・参考文献】

岩橋徹　1961「北松地域およびその周辺にみられる八ノ久保砂礫層（新称）について－“佐世保炭田”の研究（その２）－」『九州大学理学部研究報告 地質学之部』vol. 5-2、80-97頁

唐津市教育委員会　1988『馬部甚蔵山遺跡』唐津市文化財調査報告書第31集

川道寛・辻田直人　2023「ＡＴ降灰期石器群における石器石材獲得戦略～根引池石器群・栗山石器群の比較分析～」『九州旧石器』第27号、橘昌信先生追悼論文集、75-85頁、九州旧石器文化研究会

佐世保市　1969『佐世保市民俗資料調査報告書』昭和43年調査、佐世保市立図書館・佐世保市郷土研究所

佐世保市教育委員会　2018『早岐瀬戸遺跡』佐世保市文化財調査報告書第16集

佐世保市教育委員会　2022『前原遺跡』佐世保市文化財調査報告書第20集

徳永貞紹・木島愼治　2004「佐賀県」『中世墓集成－九州・沖縄編（２）－』、1-99頁、中世墓資料集成研究会

長崎県教育委員会　2005a『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原日付屋敷跡・炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第183集

長崎県教育委員会　2005b『小野Ｆ遺跡』長崎県文化財調査報告書第186集

長崎県教育委員会　2008『門前遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第４集

長崎県教育委員会　2018『諫早農業高校遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第24集

長崎県教育委員会　2022『津吹遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

長崎市教育委員会　2018『出島和蘭商館跡』銅蔵跡他中央部発掘調査報告書第１分冊（遺構・出土遺物編）・第２分冊（分析・考察編）

長崎市教育委員会　2023『魚の町遺跡（遺構、遺物調査報告及び総括編)』第１・２次発掘調査報告書

藤木聡　2007「長崎発・火打石事情」『西海考古』第７号、67-84頁

藤木聡　2012「近世における阿波大田井産チャート製火打石の流通」『西海考古』第８号、183-190頁、故福田一志氏追悼論文集刊行事務局

藤木聡　2023「長崎出島和蘭商館跡・岩原目付屋敷跡出土のガン・フリントとその背景」『九州旧石器』第27号、377-386頁、九州旧石器文化研究会

藤木聡　2025『火打石と火打金の文化史　考古学からみた火起こしの研究』吉川弘文館

船築紀子　2010「大田井産チャートの流通と大阪近世都市」『財団法人 大阪府文化財センター研究調査報告』第７集、223-254頁

松浦市教育委員会　2015『松浦市内遺跡確認調査（４)』松浦市文化財調査報告書第６集

南島原市教育委員会　2011『亀の首遺跡』南島原市文化財調査報告書第５集

南島原市教育委員会　2021『出口遺跡』南島原市文化財調査報告書第27集

【挿図出典】

図１：筆者作成。

図２：図・写真は筆者作成・撮影。

図３：１・遺構および遺物分布図は調査報告書から転載、２・３は筆者作成。写真は筆者撮影。表は調査報告書のデータに基づき筆者作成。

図４：１・２は筆者作成、３～６は藤木2025から転載、写真は筆者撮影。